フィリピンの離島における先住民の子どもたちの保健衛生習慣

Indigenous Children's Sanitation Practices in a Remote Island in the Philippines

大阪大学大学院　人間科学研究科　客員研究員　カルヴィン・デ・ロス・レイエス

Calvin DE LOS REYES
1980年4月　マニラ生まれ
フィリピン大学　公衆衛生学士
（2001年）
現在、大阪大学大学院・人間科学研究科
客員研究員，薬学修士（環境微生物学）
公衆衛生
E-mail：cdreyes3@yahoo.com

世界では、安全な水にアクセスできないこと、十分な公衆衛生サービスを受けられないこと、そして不適切な衛生習慣のために、5歳未満の子どもたちが毎年880万人以上死亡しています。フィリピンの子どもたちの健康状態は決していいわけではありませんが、フィリピンの先住民の子どもたちの健康状態は、より劣悪です。現在フィリピンには、1,200万人以上の先住民が主に離島で暮らしています。フィリピン国内に住む先住民の子どもたちの現在の保健衛生状態と衛生習慣を評価するため、パラワン州コロン島のタグバヌア少数民族の子どもたちについて調査を行いました。

先住民のコミュニティの特徴は、貧困です。家には、不十分な水や衛生設備しかありません。子どもたちは、大人の衛生行動を見習っています。子どもたちは、家の周辺の灌木や近くの小川で用を足します。また、幼児や乳児はどこでも堂々と排便することが許されているので、大便は自然環境の中に放置されてしまいます。子どもたちは、自然の中で遊んだり探検したりするのが大好きなので、すぐに排泄物と接触してしまいます。履物をはかず、はだしで遊ぶので、なおさらです。

子どもたちは、用を足した後にお尻を拭くときには、木の葉を使います。手を洗う時は、ほんの少しの水で手を濡らすだけです。石鹸で手を洗う

タグバヌア少数民族の子どもたち。何も履かず、はだしの子どもがいることに注目してください

タグバヌア少数民族の人々が、地域の医療保健センターへ行くには、ボートで１時間以上かかります

のは、石鹸がすぐそばにある時だけ。石鹸は高価な商品なので、どの家庭にもあるとは限らないからです。子どもたちはたいてい素手を使って食事をするので、手洗い習慣は大切なことです。

人々が洗濯をしたり、身体を洗ったり、家畜を水浴びさせたりする小川から汲んできた水が飲料水として使われています。雨季には、屋根からしたたり落ちる水を陶器の大きな水瓶に溜めて、家事用の水として使っています。水瓶の水は澄んでいれば飲んでも大丈夫だと考えられ、水を煮沸することはほとんどしません。そのため、水瓶の水は下痢などを起こす病原体で汚染されたままで、子どもたちも、のどが渇けばその水瓶の水を飲んでいます。

細菌、ウイルス、寄生虫は、水や土や食べ物を通じて感染します。よく洗っていない手などを介して移動し、先住民の子どもたちに下痢を引き起こします。ヘルス・ワーカーによれば、下痢はコミュニティの中ではあまりにもありふれた普通のできごと。現地の人々の間では、下痢は雨期における季節性のありきたりの症状だと受け止められてしまっています。

先住民の子どもたちの健康の現状を評価した後、先住民のための特別の母子健康手帳が開発され、タグバヌアの母親たちに紹介されました。母子健康手帳には、適切な衛生習慣に関する情報とともに、下痢の原因と予防に関するより具体的な情報も載せられています。ヘルス・ワーカーは、母子健康手帳を見ながら保健教育を続けています。この保健教育が、先住民の大人たちの行動の変化を促し、さらにその子どもたちに良い影響を及ぼすことが期待されています。母子健康手帳は、コミュニティの意識を高め、維持し、適切な衛生習慣の促進を助ける便利なツールなのです。

（翻訳：工位夏子）

バナナの葉で作った小屋で遊ぶタグバヌア少数民族の女の子

助産師による母親学級に母が耳を傾けている間、ずっと笑っていたタグバヌア少数民族の女の子

自分の母子健康手帳を手に持つタグバヌア少数民族の女の子

タグバヌア少数民族の母と子。母親学級を受けながら
母子健康手帳を参照しています

助産師による母親学級の終了後、タグバヌア少数民族の母親と子どもたちと共に（左端が筆者）